



徳川後期の物価(1) : 相対価格をめぐって

新保, 博

(Citation)

国民経済雑誌, 130(6):1-15

(Issue Date)

1974-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00171786>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00171786>



徳川後期の物価(1)

——相対価格をめぐる——

新 保 博

ま え が き

- I. 史料と加工方法
- II. 工業生産物／農業生産物価格比の動向
- III. 米以外の農産物／米価格比と工業原料
農産物／食糧農産物価格比の動向
(以上本号)
- IV. 製品／原料価格比の動向
- V. 一つの解釈

む す び

ま え が き

本稿は、徳川後期・明治期における物価史についての一連の研究の一節をなすものである。われわれの当面の課題は、天明期から慶応期にいたる大坂卸売物価の動向の検討を通じて、幕末期の経済発展について若干の接近をこころみ、明治以降における近代の経済発展に対する先行条件の解明に一つの手掛りをうることにある。われわれの物価史研究は、(1)物価水準の基本的趨勢・波動を明らかにすること、(2)相対価格の動向を明らかにすること、(3)物価の地域差を明らかにすること、の三つの焦点がおかれている。われわれは、すでに別稿において、天明期から慶応期にいたる大坂卸売物価をとりあげ、米価・一般物価および金相場の動向についての諸系列を用意するとともに、徳川後期における物価の波動と長期的趨勢に関していくつかの重要な事実を観察し、さらに、観察された事実について一つの解釈をこころみた¹。その結果明らかになった点を要

1 拙稿「徳川後期の物価水準——大坂卸売物価の動向を中心に——」(1)(2) (国民経済雑誌, 127巻2～3号, 昭和48年2～3月)。

約すれば、つぎのようなものである。

徳川後期における物価は、米価によって先導されつつ、15～20年周期の波動をしめしている。そして、文政期を画期として物価の長期的趨勢は転換し、波動をふくみながら、長期的物価上昇傾向がみられるにいたっている。物価の波動について、単因の説明は成り立ちがたいが、幕府の貨幣政策にもとづく改鋳などの貨幣的要因の変化が、物価の下降から上昇への転換の引き金となる場合が多く、また、物価波動の山における上昇から下降への転換点に、連続的な凶作による米価の急騰がみられ、この二つの要因が物価の波動と密接な関連をもっていた。つぎに、文政期から幕末にいたる長期的物価上昇傾向をもたらしした要因としては、貨幣改鋳による財政インフレと、人口増大という需給要因の長期的変化が大きな意味をもっていた。大坂における金相場（金銀交換比率）は、物価の長期的趨勢よりもむしろ波動的な動きと密接な関連をもち、その変動要因として重要なのは、大坂―江戸間の収支バランスであった。これらの観察を通じて、文政期以降、徳川期の経済発展が新しい局面にはいったことを確認することができたのである。

本稿は、前稿のあとをうけて、天明期から慶応期にいたる物価の動向を、相対価格という側面から観察し、それを通じて徳川後期における経済発展の方向をさぐると同時に、文政期を画期とする長期的趨勢の転換がみられるかどうか、また、みられたとすれば、その転換はどのような意味をもつものであったかについて検討をおこなうことを目的としている。

I 史料と加工方法

本稿において利用されている物価史料とその加工方法については、前稿すでに詳しく述べているので、²ここでは簡単にふれておくにとどめよう。後掲第1表にしめされている物価指数（享和2年～文化3年=100）を導くために主として利用されている史料は、大坂における卸売物価を収録している三井文庫編

2 前掲拙稿「徳川後期の物価水準(1)」19～27ページ。

「近世後期における主要物価の動態」(昭和27年)であるが、これに加えて山崎隆三「近世後期における農産物価格の動向」(大阪市大経済学年報, 19, 昭和38年12月)所収の物価数値が用いられている。採り上げられている商品は、加賀米(天明・寛政期は肥後米)・岡大豆・小麦(銘柄は不明)・筑前蠟(天明・寛政期は越前蠟)・繰綿(天明・寛政期は摂津繰綿, 他の時期については不明)・河内木綿・種油(天明・寛政期は京口油問屋の価格, 他の時期については不明), 白油(銘柄は不明)・日向炭・薪かし・出島砂糖に、菜種(西摂武庫地方)を加えた12品目である。われわれが対象としている全期間を通じて、これら12品目の商品の、すべてにわたり完全な連続性をもった時系列価格数値がしめされているわけではない。天明1・2年は砂糖・菜種をのぞく10品目, 天明3年〜寛政3年の時期については砂糖以外の11品目(ただし天明6年のみは、砂糖のほか菜種をのぞいた10品目), 享和2年〜文化5年は蠟を除外した11品目, さらに天保6年・明治1年については菜種をふくまない11品目の物価指数となっている。ここにあげた年度以外の年における物価指数には、12品目のすべてがふくまれている。それぞれの商品についての各年度の価格指数は、2月と9月における価格を平均したものにもとづいて算定されているが、菜種だけは新菜種の価格によっている。そして、ここにしめされている物価指数はすべて5ヵ年移動平均値となっている。

以上の手続を経て用意された各商品の価格指数を基礎にして、工業生産物／農業生産物価格比(系列1), 米以外の農産物／米価格比(系列2), 工業原料農産物／食糧農産物価格比(系列3), の各系列が作成されている。工業生産物／農業生産物価格比における工業生産物は種油・白油・木綿であり、農業生産物は米・大豆・小麦・繰綿・菜種である。つぎに、米以外の農産物／米価格比における米以外の農産物には、大豆・小麦・繰綿・菜種がふくまれている。最後に、工業原料農産物／食糧農産物価格比の場合は、工業原料農産物として繰綿・菜種が、食糧農産物として米・大豆・小麦がとり上げられている。なお、上記の諸指数算定にあたっては、それぞれにふくまれた各商品の価格指数の単純

平均値が用いられている。

工農間相対価格についてさらに立ち入った検討をおこなうために、以上の諸系列に加えて、清酒・醤油・味噌・種油・木綿の五品目について、それぞれ製品／原料価格比の系列（系列4）を用意した。清酒・醤油・味噌については大坂卸売価格を知りえないので、前出三井文庫編「近世後期における主要物価の動態」所収の「宝永7年より明治4年に至る京都・江戸日用品小売物価並賃銀表」に収録されている京都価格を用いた。これは、京都および江戸における日用品の小売物価を越後屋呉服店の購入価格によってしめたものであるから、ここに記載されているのは卸売価格でなく小売価格である。したがって、大坂の卸売価格と比較する場合には、二重の乖離があることに注意しなければならない。すなわち、大阪と京都の地域差、および卸売価格と小売価格の差が存在するのである。しかし、同一品目について大坂卸売価格と京都小売価格の両者が知られるものからみれば、京都と大坂の物価はほぼパラレルに動いており、また卸売価格と小売価格のひらきが時期によって大きく異なるということとはなかった。それ故、清酒・味噌・醤油について、京都小売価格指数を用いても、物価の長期的動向を知るには大過ないものと思われる。原料農産物としてとりあげられているのは、清酒の場合は米、味噌については大豆、種油に関しては菜種、木綿の場合は繰綿である。ただ醤油については、原料として同量の大豆と小麦を必要とするので、大豆と小麦のそれぞれの価格指数の単純平均値をもって醤油原料農産物の価格指数としている。

後掲の第1表～第3表はこのようにしてえられた諸系列をしめたものであり、第1図～第3図はこれらの諸系列をグラフ化したものである。以下、これらを基礎にして、天明～慶応期における相対価格の問題について検討をくわえてみよう。

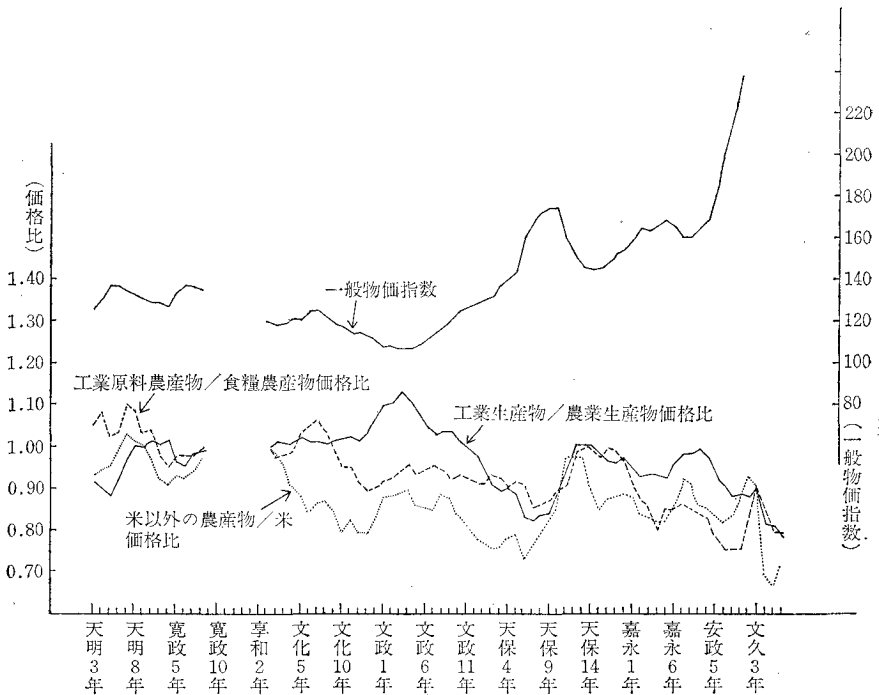
II 工業生産物／農業生産物価格比の動向

第1表は、一般物価指数と工業生産物／農業生産物価格比の動向をしめた

第1表 徳川後期における一般物価および工／農価格比(系列1)の動向

(5カ年移動平均)

	一般 物価指数	同左 両建換算 指数	工業生産 物価指数 (A)	農業生産 物価指数 (B)	工／農 価格比 (A/B)		一般 物価指数	同左 両建換算 指数	工業生産 物価指数 (A)	農業生産 物価指数 (B)	工／農 価格比 (A/B)
天明3年(1783)	106.0	114.1	102.9	111.8	0.920	文政8年(25)	97.2	96.3	98.6	95.4	1.034
4(84)	110.9	120.5	107.5	119.5	0.900	9(26)	100.2	99.2	100.8	97.3	1.036
5(85)	117.4	129.4	114.5	129.5	0.884	10(27)	105.2	104.4	102.6	101.3	1.013
6(86)	117.4	131.6	119.2	128.7	0.926	11(28)	107.6	106.6	102.7	102.7	1.000
7(87)	115.0	130.5	120.7	123.9	0.974	12(29)	108.9	108.1	102.0	103.7	0.984
8(88)	112.8	129.7	120.0	119.4	1.005	天保1年(30)	110.2	110.5	100.7	105.9	0.956
寛政1年(89)	111.4	129.7	116.9	116.4	1.004	2(31)	111.9	112.7	101.4	111.3	0.911
2(90)	109.3	125.8	113.0	111.3	1.015	3(32)	117.8	119.0	104.3	116.3	0.897
3(91)	109.2	121.7	110.6	109.7	1.008	4(33)	120.4	121.9	108.0	119.3	0.905
4(92)	107.6	118.0	109.1	107.3	1.017	5(34)	125.4	127.8	112.0	126.3	0.887
5(93)	114.1	123.2	107.1	111.3	0.962	6(35)	141.8	145.4	122.4	146.5	0.835
6(94)	117.7	125.7	109.1	114.5	0.953	7(36)	148.6	154.1	128.7	155.9	0.826
7(95)	117.1	123.7	109.2	110.9	0.985	8(37)	152.3	160.0	133.5	159.0	0.840
8(96)	115.7	121.7	107.4	108.5	0.990	9(38)	154.4	163.4	136.1	160.5	0.848
9(97)						10(39)	153.1	161.5	137.7	155.8	0.884
10(98)						11(40)	140.0	146.1	131.1	138.2	0.949
11(99)						12(41)	132.1	135.5	125.5	125.3	1.002
12(1800)						13(42)	126.0	127.3	118.6	118.3	1.003
享和1年(01)						14(43)	125.3	125.7	116.9	116.5	1.003
2(02)						弘化1年(44)	125.9	125.5	116.5	118.1	0.996
3(03)						2(45)	128.2	127.7	119.5	123.3	0.969
文化1年(04)	100.0	100.0	100.0	100.0	1.000	3(46)	132.5	132.2	124.2	128.7	0.965
2(05)	98.7	97.9	99.2	97.6	1.016	4(47)	135.5	135.6	129.4	132.4	0.977
3(06)	99.7	97.7	98.3	97.3	1.010	嘉永1年(48)	139.8	140.9	130.7	138.8	0.942
4(07)	100.8	98.6	98.1	97.0	1.011	2(49)	144.9	146.8	134.1	144.2	0.930
5(08)	101.3	99.5	98.4	96.2	1.023	3(50)	144.0	146.2	132.4	141.8	0.934
6(09)	104.9	103.6	99.3	97.8	1.015	4(51)	146.6	148.5	133.9	144.0	0.930
7(10)	105.4	104.5	98.6	97.5	1.011	5(52)	149.2	150.1	135.6	146.3	0.927
8(11)	102.3	102.0	95.8	95.0	1.008	6(53)	146.4	144.1	137.0	142.1	0.964
9(12)	99.1	98.7	94.1	92.5	1.017	安政1年(54)	141.2	136.0	133.7	136.1	0.982
10(13)	97.4	96.4	92.6	90.8	1.020	2(55)	141.4	133.0	134.7	136.4	0.988
11(14)	94.1	93.2	91.1	89.0	1.024	3(56)	145.1	133.5	136.3	137.3	0.993
12(15)	94.4	93.0	90.8	89.3	1.017	4(57)	148.8	134.5	136.5	139.9	0.976
13(16)	93.1	92.4	91.4	88.0	1.039	5(58)	162.5	145.1	143.7	154.9	0.929
14(17)	90.7	91.3	91.8	85.7	1.071	6(59)	183.5	162.7	161.4	178.2	0.906
文政1年(18)	88.2	90.8	92.1	83.7	1.100	万延1年(60)	196.5	173.3	172.2	195.7	0.880
2(19)	88.6	92.3	93.9	84.8	1.107	文久1年(61)	216.8	183.7	191.7	216.3	0.886
3(20)	86.8	91.3	94.2	83.3	1.131	2(62)	249.8	202.9	223.4	251.8	0.887
4(21)	86.7	90.7	93.7	84.4	1.110	3(63)	305.1	233.4	277.2	306.9	0.903
5(22)	88.4	91.0	93.1	85.8	1.085	元治1年(64)	449.6	314.0	366.2	447.9	0.818
6(23)	91.2	92.1	93.8	89.3	1.050	慶応1年(65)	619.5	386.9	502.7	620.7	0.810
7(24)	94.4	94.3	95.4	92.6	1.030	2(66)	761.5	380.0	618.8	782.7	0.791



第1図 一般物価・工／農価格比 米以外農産物／米価格比・
工業原料農産物／食糧農産物価格比の動向

ものである。なお、一般物価指数については、銀建物価指数のほかに、大坂におけるその年の平均金相場（金銀交換比率）によって両単位に換算した両建物価指数がのせられている。徳川後期においては、大坂地方でも「銀遣い」でありながら、実際の取引において授受される交換手段・支払手段は、一般は、丁銀・豆板銀のような秤量銀貨ではなく、金貨のほか1分銀・2朱銀などの定位銀貨をふくむ定位貨幣であった。³その意味においては、銀建物価指数よりもむ

3 拙稿「徳川時代後期西摂農村における貨幣流通——摂津国八郡花熊村の史料を中心にして——」（兵庫県の歴史、11、昭和49年5月）1～7ページ。

しろ「両」建物価指数の方が、現実の物価の動きを反映しているといえるのである。銀建物価指数と「両」建物価指数を比較すると、後者の方が波動の振幅が大きくなっている。これは、物価が高い水準にあるときは一般に銀安であり、これに反して物価が低い水準にあるときは銀高であり、金相場の動きは物価の動きに対して相殺的でなく相乗的に作用しているためである。したがって、銀建にしても「両」建にしても、一般物価の長期的趨勢にはまったく異なるところはないといえよう。第1図は、銀建一般物価指数と工業生産物／農業生産物価格比に加えて、工業原料農産物／食糧農産物価格比をグラフ化したものである。第1表と第1図から、われわれはつぎのような事実を観察することができる。

系列1すなわち工業生産物／農業生産物価格比の動きは、文政3年(1820)を分水嶺として二つの局面に分かれている。天明3年(1783)から文政期のはじめまでは、工／農価格比は上昇傾向をしめし、農業生産物の相対価格は低落している。しかし、文政3年を画期として、工／農価格比は下降傾向に転じ、天保7年(1835)まで急下降した。その後天保12年にかけて価格比は急上昇し、しばらくの間その水準が維持されていたが、安政から慶応にかけて価格比はふたたび急激に崩落した。文政以降の幕末期を通じてみると、全体としての趨勢は下降をしめしており、農業生産物の相対価格は上昇傾向にあったとみとめることができる。

つぎに、上にみたような工／農価格比の動向を一般物価の動きと対比させてみると、大変興味ぶかい事実が見出される。工／農価格比が上昇し、農業生産物価格が相対的に低くなっていく時期は、第1図からはっきり読みとれるように、例外なく物価下落期であった。逆に、価格比が下降し、農業生産物の相対価格が上昇している時期は、一般に物価上昇期であった。ところで、別稿において明らかにしたように、徳川後期においては、物価の上昇・下降のいずれの局面を問わず、米価が⁴つねに一般物価の動きを先導していた。米価が高騰する

4 前掲拙稿「徳川後期の物価水準(1)」33～4ページ。

と、そのあとを追って、他の農業生産物のみならず工業生産物の価格は上昇をしめし、また米価の下落は他の物価の下降を導いている。したがって、物価下降期に農業生産物の相対価格が低くなることは、工業生産物以上に農業生産物の価格が下落していることを意味し、これに対して物価上昇期には農業生産物の価格騰貴が工業生産物のそれをはるかに上まわったことを意味している。いかえれば、工業生産物価格にくらべて農業生産物の上下の変動巾は大きかったのである。天明～文政期をとった場合、農業生産物価格指数は 83.3～129.5 の間を変動しており、その変動巾は 46.2 であったが、工業生産物については 98.8～120.7 が変動範囲で、上限と下限の差すなわち変動巾は 29.9 となっていた。最高値は農業生産物の方が高く、最低値も農業生産物が低く、したがって変動巾は明らかに農業生産物が工業生産物をはるかに上まわっている。文政～慶応期に関しても、後掲第 3 表から明らかなように、まったく同じ傾向が貫徹している。

われわれは、天明～文政の物価下降期に農業生産物の相対価格も低落し、文政～慶応の物価上昇期には農業生産物の相対価格も騰貴したことを確認しえた。第 1 表にみられる農業生産物価格指数は米・大豆・小麦・菜種・綿の 5 品目から成っているので、これをもって農業生産物一般の動向をあらわしているとみて差支えないが、工業生産物については、種油・白油・木綿の 3 品目にすぎず、しかも種油と白油は密接な代替関係があるため両者の価格はまったく同じように動いており、また、後掲第 4 表・第 2 図から知られるように、種油と木綿の場合の製品／原料価格比はいくらか異なった動きをみせているので、これによって工業生産物価格の一般的動向とみてよいか否か問題がのこっている。しかし第 4 表および第 3 図にしめされている清酒・味噌・醤油の製品／原料価格比は、第 1 表にみる工／農価格比の動向にほぼ類似した動きをとっている。それ故、第 1 表にみられる工／農価格比によって農業生産物の相対価格の動きをとらえても大きな過ちをおかすことにはならないであろう。

III 米以外の農産物／米価格比と工業原料農産物／食糧農産物価格比の動向

徳川時代における米は特殊な地位を占める商品であり、一般物価に対して先導的役割をはたしていた。また、その価格の短期的変動も他の商品のそれにくらべてきわめて大きいものであった。第1表の農業生産物のなかにはこの米がふくまれている。したがって、米価の動きを十分に把握するためには、米以外の農業生産物の価格との比較をおこなわなければならない。さらに、別の観点からみれば、農業生産物は食糧と工業原料とに大別される。そこで、米以外の農産物と米との価格比の動き(系列2)を観察するとともに、工業原料農産物と食糧農産物との価格比の趨勢(系列3)を知るために、第2表を用意した。両系列とも第1図にグラフ化してある。

両系列とも大体において同じような動きをしめしているが、これらを系列1の工／農価格比の動きと対比してみると、かなり大きく異なっている。工／農価格比は、天明から文政にかけて上昇傾向をたどっているが、系列2と系列3はこの時期にむしろ下降傾向が明白であった。文政から慶応にいたる時期に目をうつすと、系列1については天明～文政期から一転して下降傾向が顕著になっているのに対して、系列2と系列3の両系列は、横ばいかわずかな下降傾向をみせている。すでに指摘したように、一般物価の動きと工／農価格比の動きは密接な関連をもっており、物価上昇期に価格比は下降し、物価下降期には逆に価格比は上昇していた。しかし、ここでとりあげる二つの系列は、天明から慶応までの全期間を通じて、物価の一般的動向と強い関連をもっていたとはいえない。両系列の動きと一般物価の動向の間の関係は、文政期を画期として明らかに大きな変化が生じている。天明～文政期の物価下限期には両系列とも下降傾向をしめしているから、米や食糧農産物価格が他の農産物価格にくらべて相対的に高くなっていることを意味する。もちろん、この時期には工業生産物以上に農業生産物の価格は下落しており、米価の下落も当然顕著であった。それにもかかわらず、両系列が下降傾向にあることは、米以外の農産物や工業原

第2表 徳川後期における米以外の農産物／米価格比（系列2）

工業原料農産物／食糧農産物価格比（系列3）の動向

（5カ年移動平均）

	米価指数 (A)	米以外の 農産物価 格指数(B)	同価格比 (B/A)	食糧農産 物価格指 数(C)	工業原料 農産物価 格指数(D)	同価格比 (D/C)		米価指数 (A)	米以外の 農産物価 格指数(B)	同価格比 (B/A)	食糧農産 物価格指 数(C)	工業原料 農産物価 格指数(D)	同価格比 (D/C)
天明3年	118.6	110.4	0.931	111.0	117.2	1.056	文政8年	105.4	93.2	0.884	97.6	92.2	0.944
4	125.0	118.6	0.948	117.8	128.0	1.087	9	108.3	94.8	0.875	100.5	92.7	0.922
5	134.0	128.9	0.958	129.6	133.4	1.029	10	116.9	97.8	0.836	104.3	97.0	0.932
6	130.3	129.1	0.990	128.4	133.4	1.039	11	121.4	98.5	0.811	105.9	98.0	0.925
7	121.3	125.4	1.033	121.6	134.4	1.105	12	126.1	98.6	0.781	107.4	98.2	0.915
8	118.6	120.4	1.015	117.6	128.1	1.090	天保1年	129.7	99.8	0.769	109.2	99.5	0.912
寛政1年	115.8	116.5	1.006	114.8	118.1	1.033	2	139.0	105.0	0.755	114.4	105.8	0.934
2	114.1	110.6	0.969	109.4	114.0	1.042	3	144.9	109.9	0.758	119.8	111.1	0.928
3	116.8	108.0	0.922	110.4	108.5	0.984	4	145.3	115.5	0.780	124.1	112.6	0.907
4	115.6	105.5	0.912	109.5	104.3	0.953	5	152.0	120.1	0.792	130.6	119.9	0.919
5	117.8	109.9	0.932	112.1	110.2	0.983	6	187.4	137.4	0.734	152.2	138.4	0.909
6	121.7	112.8	0.926	115.3	113.1	0.981	7	192.9	147.6	0.764	165.5	142.2	0.859
7	116.2	109.7	0.943	111.8	109.8	0.982	8	190.1	152.0	0.799	168.4	145.5	0.864
8	114.4	108.1	0.972	108.6	108.2	0.997	9	187.1	154.5	0.826	167.2	146.0	0.875
9							10	174.0	151.6	0.871	162.5	146.0	0.899
10							11	141.2	137.5	0.973	143.2	131.0	0.915
11							12	127.5	124.8	0.979	125.9	124.4	0.988
12							13	120.7	117.3	0.975	118.3	118.3	1.000
享和1年							14	126.9	114.2	0.900	116.6	116.3	0.997
2							弘化1年	135.0	114.3	0.846	119.3	116.4	0.976
3							2	137.3	120.0	0.874	123.3	123.1	0.999
文化1年	100.0	100.0	1.000	100.0	100.0	1.000	3	142.6	125.5	0.880	128.9	128.1	0.994
2	98.9	97.2	0.983	98.5	96.3	0.978	4	146.0	129.3	0.885	134.2	129.8	0.968
3	101.9	97.1	0.953	98.1	96.2	0.981	嵩永1年	153.7	135.3	0.880	143.6	131.8	0.918
4	105.3	95.3	0.904	97.4	96.7	0.993	2	166.0	139.2	0.838	151.9	133.0	0.876
5	106.0	94.0	0.886	94.7	98.2	1.037	3	165.0	136.6	0.828	150.9	128.9	0.854
6	112.4	94.6	0.842	95.9	109.6	1.050	4	167.8	132.2	0.812	154.3	124.7	0.809
7	110.2	95.0	0.862	95.1	101.6	1.068	5	171.5	141.3	0.823	156.2	133.5	0.855
8	106.5	92.4	0.868	93.7	96.8	1.033	6	161.1	137.8	0.855	151.0	129.2	0.856
9	105.9	89.5	0.845	93.1	91.6	0.984	安政1年	144.7	134.1	0.926	144.4	124.3	0.861
10	109.1	86.6	0.794	92.6	88.0	0.951	2	146.9	134.0	0.912	145.3	123.7	0.851
11	103.9	85.7	0.824	90.8	86.5	0.953	3	154.9	133.2	0.860	147.2	123.0	0.836
12	107.5	85.1	0.791	92.5	84.5	0.914	4	160.1	136.2	0.851	150.5	124.7	0.829
13	106.1	84.0	0.791	92.0	82.3	0.895	5	179.2	149.4	0.834	169.9	133.5	0.786
14	99.6	82.6	0.828	89.3	80.6	0.902	6	209.4	171.1	0.817	198.2	149.5	0.755
文政1年	92.7	81.6	0.880	86.5	79.6	0.920	万延1年	226.8	188.6	0.831	217.2	164.4	0.755
2	93.8	82.7	0.882	87.3	81.2	0.930	文久1年	242.6	210.3	0.867	240.0	182.5	0.760
3	91.6	81.4	0.889	85.2	80.6	0.947	2	267.0	248.1	0.929	268.7	227.3	0.847
4	92.2	82.7	0.896	85.9	82.2	0.956	3	330.5	301.5	0.912	317.7	291.3	0.917
5	97.1	83.3	0.858	88.2	82.5	0.936	元治1年	598.3	414.2	0.692	477.3	405.9	0.850
6	102.6	87.6	0.854	91.3	86.3	0.945	慶応1年	850.5	569.1	0.668	676.7	540.6	0.799
7	105.9	89.6	0.846	94.3	90.2	0.956	2	990.3	723.5	0.724	834.0	660.8	0.793

料農産物の価格が米や食糧農産物よりも大きく下落したことをしめすものにほかならない。このことは、天明～文政期に関するかぎり、米や食糧農産物価格の上下への変動巾が相対的に小さかったことを意味する。すでに指摘しておいたように米価の短期的変動はきわめて大きいものであったにもかかわらず、長期的趨勢における変動巾が相対的に小さかったことは、大いに注目すべきであろう。何故なら、価格弾力性が小さいと考えられる米や食糧農産物の方が、かえって他の農業生産物よりも価格変動巾が小さいことにならざるをえないからである。ところで、このような傾向が文政以降にもみられるならば、物価上昇期であるこの時期には系列2と系列3は両者とも上昇傾向があらわれるはずである。しかし、文政～慶応期における趨勢としては、系列2・系列3はいずれも横ばいか下降しており、米や食糧農産物の他の農産物に対する相対価格が騰貴したことをあらわしている。したがって、文政期以降においては、米や食糧農産物が逆に他の農産物にくらべて相対的に大きな価格変動巾をもっていたことになる。この点においても、文政期を画期にして大きな転換が生じているといわなければならない。

つぎに、系列2と系列3の比較をおこなってみよう。両系列は大体において同じような趨勢をしめしているといえるが、いくつかの点で重要な相違点が見出される。第1は、系列2の方が系列3よりも変動巾が大きいことである。しかし、全期間を通じてそうであったわけではない。文政期以前においては両系列の変動巾はほぼ同程度であり、同系列のちがいが明確となったのは文政期以降のことである。系列3の工業原料農産物／食糧農産物価格比は、天保12年(1841)から弘化3年(1846)にかけての数年間と文久3年(1863)前後に大きな変動が生じている以外は、一般的に安定的であった。これに対して、系列2の米以外の農産物／米価格比はかなり変動している。これは、第2表や後掲第3表に明らかなように、米価の変動巾が他の農産物に比して大きいためであった。これに反して、工業原料農産物／食糧農産物価格比の場合には、米価の大きな変動巾が他の食糧農産物のなかに吸収されてしまったため、米価がいち

じるしい変動をしめした特定の時期をのぞいてはその価格比が安定的となっていたものである。

第2に注目される点は、系列2が文政～慶応期には趨勢として横ばい傾向であったのに対して、系列3はわずかではあるが下降傾向をしめしていることである。米価の変動巾が相対的に大きいために米の相対価格は短期的にはかなり動くものの、長期的にみると米と他の食糧農産物の価格比は一定の水準をたもっていたといえることができる。ところが、系列3の場合には、工業原料農産物の価格は食糧農産物のそれにくらべて変動巾が小さく安定的であり、幕末の物価上昇期に食糧農産物ほどの価格騰貴をしめさず、その結果、系列3の工業原料農産物／食糧農産物の価格比の長期的趨勢は下降傾向をとるにいたったのである。系列3は、すでに明らかにしたように、天明～文政期にはっきりした低落趨勢をみせている。したがって、工業原料農産物の相対価格は、徳川後期における長期的趨勢として低落傾向にあったとみることができる。この点は、系列1の工／農価格比の動きと系列3の工業原料農産物／食糧農産物価格比の動きを比較するときいっそう明白となる。前者の系列については大きく変動しているとはいえ、天明から幕末にいたる全期間を通ずる趨勢としては上昇も下降もしていないのである。これにくらべれば、後者の系列はその変動の巾はそれほど大きくないが、趨勢として下降傾向にあったことは疑問の余地がない。

以上われわれは相対価格に関する諸系列をみてきたが、それらの諸系列は必ずしも安定的でなく、かなり大きく動いており、しかも各系列はパラレルに動いていないことが明らかとなった。徳川時代の物価は米価を先導にして動いており、各商品の価格はいずれも同じ方向に動いていた。それにもかかわらず、相対価格に大きな変動が生じているのは、各商品の価格変動の大きさにちががあるためであった。各系列はパラレルに動いていないとはいえ、文政3年ごろをさかいにして大きな変化が生じている。一般物価の動きも文政3年を画期として局面を異にしている。天明から文政にかけて低落傾向にあった物価は、文政3年以後騰勢に転じ、その後波動をふくみながらも慶応にいたるまで急速

な上昇をしめしている。文政3年は一般物価の動きにおける転換点であったばかりでなく、相対価格の諸系列そのものの動きや諸系列間の関係についても転換点となっているのである。このことを明確にするために第3表を用意した。天明3年から嘉永6年にいたるまでを文政3年をさかいにして二つの時期に分け、それぞれの時期について、一般物価・米・食糧農産物・工業原料農産物・工業生産物の各価格指数の最高値・最低値・変動巾をしめしたものである。なお、文政期以降を文政～慶応期とせず文政～嘉永期としたのは、安政から慶応にかけて物価騰貴は異常に大きなものであったから、比較をおこなうためにはこの時期をのぞくのが適当だからである。この第3表は、われわれにきわめて興味ぶかいいくつかの事実をしめしている。ここにあげられている4種の価格

第3表 徳川後期における価格変動比較

			天明3年(1783) ～文政3年(1820)	文政4年(1821) ～嘉永6年(1851)
一般物価		最高値 最低値 変動巾	117.7(寛政6年) 86.8(文政3年) 30.9	154.4(天保9年) 86.7(文政4年) 67.7
農 業 生 産 物	全農産物	最高値 最低値 変動巾	129.5(天明5年) 83.3(文政3年) 46.2	160.5(天保9年) 84.4(文政4年) 76.1
	米	最高値 最低値 変動巾	134.0(天明5年) 91.6(文政3年) 42.4	192.9(天保7年) 92.2(文政4年) 100.7
	食糧	最高値 最低値 変動巾	129.6(天明5年) 85.2(文政3年) 44.4	168.4(天保8年) 85.9(文政4年) 82.5
	工業原料	最高値 最低値 変動巾	134.4(天明7年) 80.6(文政3年) 53.8	148.0(天保9年) 82.2(文政4年) 65.8
工業生産物		最高値 最低値 変動巾	120.7(天明7年) 90.8(文化12年) 29.9	137.7(天保10年) 93.1(文政5年) 44.6

系列のうちもっとも安定的で変動巾の小さいのは、天明～文政期・文政～嘉永期のいずれにおいても、工業生産物であった。両期を通じて工業生産物の価格変動巾は全農業生産物の平均価格変動巾の60%程度にすぎず、その点では天明～文政期と文政～慶応期との間にちがいが無い。しかし、農産物についての3種の価格系列をみると、天明～文政期と文政～嘉永期とではまったく異なった特徴をしめしている。天明～文政期の場合、変動巾がもっとも大きいのは工業原料農産物で、食糧農産物がこれに次ぎ、米がもっとも安定的であった。一般的にいえば、変動巾は米・食糧農産物・工業原料農産物の順に小さくなっていくと考えられるが、天明～文政期にはまったくその逆となっている。これは十分に注目されねばならない。だが、このことは、必ずしも米価の先導性と矛盾するものではなかった。価格指数の最高値をしめす年は、米と食糧農産物が天明5年であるのに対して、工業原料農産物と工業生産物がともに天明7年であり、前者の先行性は明らかであった。つぎに注目されるのは、この時期における米価の下方硬直性である。われわれの価格指数は、享和2年～文化3年の平均価格を基準としているが、平均米価は55.5匁で、元文期から文化期にいたる期間の平均米価に近い⁵。したがって、これを基準として上下への変動巾をとり、下方への変動巾が上方への変動巾よりもはるかに小さく、しかも他の物価の下方変動巾よりかなり小さいならば、米価の下方硬直性をみとめることができる。第3表をみると、天明における米価指数の最高値は134.0で、工業原料農産物の134.4に次ぐ高いものであった。だが、物価のもっとも低落している文政期における米価指数の最低値は91.6で、基準年にくらべてわずかに10%たらずの低落にとどまっている。食糧農産物の最低値は85.2、工業原料農産物については80.6、工業生産物の場合でも90.8であり、米価の下方変動巾がもっとも小さいのである。天明～文政期における米価の下方硬直性は否定できないであろう。文政～嘉永期になると、様相が大きくかわってくる。この時期においてもっと

5 元文1年(1736)から文化14年(1817)にいたる82年間の備前米の平均価格は石当り銀59.7匁であり、最高は天明3年(1783)の92.5匁、最低は宝暦3年(1753)の39.7匁であった。

も変動巾の大きいのは米であり、食糧農産物がこれに次ぎ、もっとも小さかったのは工業原料農産物であった。農産物に関するかぎり、天明～文政期とはまったく逆転しているのである。最高値をしめす年は、米が天保7年、食糧農産物が天保8年、工業原料農産物が天保9年、工業生産物が天保10年と、変動巾の大きい順にならび、しかも1年ずつずれている。いいかえれば、価格変動のもっとも大きい米に価格上昇がおこり、これに先導されて食糧農産物の価格も上昇するが、その変動巾は米より小さくなる。次いで、1年おくれて、工業原料農産物価格の最高値がおとずれ、価格の変動巾はさらに小さくなる。最後に、工業生産物が最高値に達するが、その変動巾はもっとも小さい。したがって、文政～嘉永期には、一般に予想されるような変動巾の順序がそのままあらわれているのである。そして、この時期が物価上昇趨勢にあったために、米価の下方硬直性については必ずしも明確に語りえないが、天保11～13年および安政1・2年といった物価低落期における米価の崩落はいちじるしいものがあり、天明～文政期にみられた米価の下方硬直性もこの時期には姿を消しているとみてよいと思われる。これらの事実は、幕末期の物価変動の重要な特徴をなすものであり、われわれはこれに十分に注目しなければならない。(以下次号)